

葬式仏教

児玉 寛嗣

先ごろ「支援者からコメを貰うのでコメは売るほどある」という発言で顰蹙を買った大臣を辞めた国会議員がいた。小学生の頃のこと、農家でもない実家にもコメが売るほどあったことを思い出した。廃寺になったが実家は浄土真宗の末寺だった。門徒に農家も多く、稲刈りの後、ほどなくして寺に新米を寄進していた。その後、田圃もだんだんと宅地化が進んでその習わしもいつのまにかなくなった。お寺にコメを寄進するのは寺へのお布施という意味だけでなく寺に祀られている先祖に供養の念を込めてそのコメを食べてもらいたいとの気持ちの表れでもあったのだろう。

インドが発祥の地、釈迦が開祖の仏教、その役割は生きている人の救済をすることであつたのではないか。日本の仏教は家族の葬式を発端とし、その後長年に亘って法要・供養を司る葬式仏教である。

仏壇を各家に置くのは日本特有のこと。天武天皇が「諸国の家毎に仏舎を作り、仏像及び経を置いて礼拝供養せよ」との詔を出し、貴族がそれに従った。それが庶民にも広がったと考えられている。盆には祖先の魂が家に戻ってくると信じられている。住職の父が炎天下の盆に門徒の各家を周り、先祖が祀られている仏壇の前で読経を行って汗だくになって帰ってきたことを思い出す。

日本では古来、自然にあるどのようなものにも神が宿るとされ、人も亡くなれば神になるとされていた。しかし、横死など不幸な死に方をすれば、魂が漂い、神にもなれない、いわゆる成仏できない状態となり祟りを起こすと考えられていた。祟りを恐れ、魂を鎮めるための祭事が行われた。仏教の伝来後は、仏像に祈りを捧げることで成仏してもらおうとした。権力者は大きな寺院を各地に建立したが、その目的は権力の誇示や、国家安寧、民の幸福を祈念することだけでなく、権力争いで横死したライバルの祟りを恐れ、権力者は寺院を建立して供養することで祟りから逃れようとした意図もあつたのではないか。

今後、葬式仏教はどこに向かうのだろうか。